

---

---

## 事業報告

---

---

平成7年度

## 公開講座概要

総合研究所が担当する平成7年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は16回目を数え、「大和の歴史と風土」をテーマに開催、受講申し込み者は250名で、全5回の講座に、延べ882名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施。地元の希望を尊重し、地元に着目したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、166名の申し込みで、延べ706名が受講し、都祁村教養講座には70名の申し込みで、延べ232名の受講があった。

また、8回目の社会学部公開講座は、「高齢者のパワーを生かす社会を目指して」をテーマに、ならマーチャントシードセンターを会場にして開催し、約100名の受講があった。

### 桜井市生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう  
—郷土を学び新しい時代を知る—

5月14日 大和王権の創業神話と桜井

松前 健

記・紀の語る大和朝廷創業の主は神武天皇であるが、その実名は神日本磐余彦かみやまといわれひこと呼ばれ、「神聖な大和国の磐余いわれの首長」を意味する。

磐余は石村、石寸とも記される地で、古代大和の東南部一帯で、その境域は、桜井市戒重から橿原市の、耳梨・香具・畝傍の大和三山あたりまでであり、そこから飛鳥まで磐余道いわれみちが通じている。この地帯は、記・紀によれば、履中(20)、清寧(22)、継体(26)、敏達(30)、用明(31)、崇峻(32)と、五世紀前半から六世紀後半までの諸天皇の皇居のあった地と記される。この記・紀の記載は、ほぼ史実を反映しているとされている。この地域は、大和の最も古い宗教・政治文化の中心であったとされる桜井市西北の三輪山山麓地帯・磯城地方しきなどから見ると、遙かに後進地帯であるが、不思議なことに、大和王室の創業の主とされる神武がこれを名としているばかりでなく、その伝説に表われる場が、殆どこの地を舞台としている。香具山、畝傍、

久米、磐余邑などの名が盛んに出て来、大伴・物部・久米などの、五、六世紀ごろ活躍した諸氏族の族祖の英雄たちの軍事活動や、香具山、畝傍などの祭祀行為、久米部の軍団の軍歌舞などが、語られる。主水部、主殿部もいどりべなどの、後の律令制下の官人組織の前身らしきものの活躍も表われる。

神武伝承とは、恐らく、このイワレ王都時代ともいわれるころに生まれた建国の英雄伝承であろう。

6月11日

## 保田興重郎と私

堤 博 美

保田興重郎は稀有の文学者であった。その博覧強記は年少時からの東西古今の古典の濫読に由来する。旧制中学の時に『万葉集古義』を愛読したのもその一例である。この早熟な文学少年は長ずるにおよんでドイツ語を学び、西洋美学を修め、泰西の文芸にも通暁した。少年にして滅ぶことこそは美しいと感じた青年が、ゲーテのヴェルテルを耽読し、ドイツロマン派に傾倒したのも決して偶然ではない。

保田興重郎はだが二十代半ばに突如として西洋美学と訣別し、自らの内なる伝統的詩魂へと回帰した。かくて芭蕉、後鳥羽院、西行から王朝文学、そしてついに万葉集の精神に逆上り、そこから翻って国史の尊重、国学の継承、さらに風雅の美の復興に邁進する。ここに幕末以来の新たな昭和の国学の志士が誕生した。保田興重郎はしかし国際化が時流の今日、ともすれば反動的な国粹主義者と敬遠されがちである。その皮相な偏見を打破し、彼の目指したものを自覚し、それを我々日本人は継承弘布する責務がある。保田の気高い志の一端を垣間見せる言葉を一つ。「文学が最大の敵としてたかばねばならぬ思想は、この世の中のことはすべて金だといふ悪思想である」

7月9日 地域住民のスポーツ活動について

田 原 武 彦

今日、スポーツ活動は、従来の学校体育や競技スポーツ中心の形にとどまらず、広く大衆社会に拡大してきている。その背景には、わが国の行政のスポーツ振興や様々な社会環境の変化あるいは国民のニーズなどがあげられよう。

そこで、最近の大衆スポーツ活動を見た場合、特に、地域の人々のスポーツに対する関心も非常に高まり、その実施目的、内容、形態なども多様化している。現実にも、その傾向は、例えば商業ベースのスポーツクラブ加入や地域のスポーツクラブ参加、また、行政主催のスポーツ行事参加、あるいは職場仲間、家族での実施など、様々な形を見ても伺える。

したがって、今後の課題は、このようなスポーツの拡大が単なる流行だけで終わることなく、より一層発展させることが望ましいのである。

本講座においては、特に、地域の人々のスポーツ活動を取り上げ、地域社会とスポーツとの兼ね合いなどを考えて、今後の地域のスポーツの在り方などを述べた。

9月10日

## 桜井市古代地名考

池田末則

桜井市内は「古事記」・「日本書紀」・「万葉集」記載の古代地名がもっとも多く分布・残存する地域である。また、「意紫沙加」(忍坂)、「佐久羅章」(桜井)、斯鬼宮(磯城宮)、「斯期斯麻」(式島)、「乎沙陀」(他田)、など、五～七世紀の金石銘文(鏡・刀剣・露盤など)の地名も今なお生きている。これらの地名は単なる土地表示の名称ではなく、考古学の出土資料と同様、原風土を証明する貴重な古代人の言語である。

つまり、地名は人間の社会生活と同時に発生した古代語の化石——今も息づく文化財である。桜井地域の古代地名群の包含層を発掘し、地名発生年代、用字・発音の伝承過程の究明は古代史の解明に重要な視点を孕んでいる。

すでにヨーロッパ諸国の歴史学は考古学・地名学・書体学など、有力な補助学の採用によって急速な発達をみた。日本でも都道府県別・日本歴史地名大系(平凡社)、同別地名大辞典(角川書店)など、各々約五十巻という明治以来の画期的出版事業が近く完成する。かつて柳田国男は「地名が千年以上、切れまもなく生きてきた実例を、大和のように顕著に、また数多くもっている地方は、実は稀なのである。……地名研究の新機運は大和におこるべきである」(『地名の研究』)と力説した。因みに、昭和57年、川崎市では公立の日本地名研究所が発足、また最近、環境庁自然保護局調査室では全国地名調査を実施し、自然環境保全基礎資料を整備するなど、行政側からの地名研究の推進をみることは欣ばしい傾向である。今回、地名研究に有利な条件を備えた桜井市内の特に『記・紀』地名説話について探ってみた。

11月26日

## 芭蕉と桜井

—近世文学に見る桜井—

永井一彰

記録によれば、松尾芭蕉が大和の地へ足を踏み入れたのは、その生涯に五度あります。そのうち、桜井の周辺で作品を残したのは、貞享四年十月から翌五年(元禄元年)四月にかけての「笈の小文」の旅の折で、この時芭蕉は長谷寺・三輪・多武峰・細峠・竜門・吉野・唐招提寺・在原寺・布留神社・八木・当麻などを回っています。この折に芭蕉が残した発句・俳文・手紙と、芭蕉の門人が桜井周辺を詠んだ発句などを取りあげて、彼らのこの地への思いを探ってみました。

1月14日 共に生きるまち、桜井をめざして  
—21世紀の高齢者福祉のあり方—

桂 良太郎

21世紀の桜井のまちはどのように変わっていくのでしょうか？ はたして今よりも安心してくらしていけるまちになっているのでしょうか。これからの将来の桜井のまちの未来像について考えていきましょう。家庭、地域でわたしたちができる福祉のまちづくりの知恵をみんなで出し合いながら、だれもが生き生きと、安心して、生きがいをもってくらせるまち桜井のあり方を考えました。

そのためのキーワードとして3つあげておきます。‘ゆとり’‘ゆめ’‘ゆうぎ’、三つの‘ゆ’があなたにありますか。この桜井で見つけられますか。今までの社会福祉観をとり去り、新しい社会福祉のあり方をぜひ考えていきましょう。21世紀は高齢者の活躍する世紀です。保健医療と教育のあり方に高齢者自身の知恵を生かすまちづくりを考える講座です。現代版井戸端会議をやりました。

2月18日 古代の宮都と桜井

水野正好

古代、天皇は一代ごとに都を遷した。時には一代で二度、三度も都を遷した場合もある。そうした数多い都の中で注目されるのは、崇神天皇の都・磯城瑞籬宮、雄略天皇の都・磯城宮である。

長い間、雄略天皇などは実在しない天皇と説く所見もあったが、埼玉県稲荷山古墳の辛亥年銘鉄剣の発見で雄略天皇＝獲加多岐齒大王の実在は確定し、その宮都—磯城宮の存在も知られた。

桜井市域の名所、三輪山。この山に坐す大物主神を奉斎するのは出雲氏であり、いまでも山麓に出雲の地名をとどめている。この出雲氏の居地に割り込む形で営まれたのが磯城瑞籬宮である。崇神天皇の奉斎が粗であったためか大物主神の祟りを生じ、人々の災厄を生む。こうした過程で神託があり、結果、大神神社が成立してくる。都と社、一体としての景観が生まれるのである。この三輪山大物主神の神妻は倭迹々日百襲媛、彼女の死を介して箸墓古墳が築かれたと書紀は記している。しかもその築かれた地は瑞籬宮に接した「大市」。大市は都の市・国の市であり、この市の繁栄を背景に都が維持され、ここに集う物資を消費して箸墓古墳が営まれていくのである。倭迹々日百襲媛の伝承や箸墓古墳造営は大市の人々の口を伝って全国に拡散されていくわけである。市は情報の集う所、発する所である。都・社・市・墓をふくめて桜井市の古代宮都の語りは実に楽しく、古代を復元する上での最適地となっているのである。

## 3月10日 死別の悲しみは超えられるか

—愛する人を失った時の深い悲しみをいかに乗り越えるかを考える—

大町 公

最近注目を集めている「死への準備教育」の大切な一領域として「悲嘆教育」がある。愛する人を亡くした時の悲嘆から、いかにして立直るかをアドバイスしようとする研究である。今世紀の思想家フロイトによれば、人が死別の悲しみを乗り越えるには、「喪の仕事」を果たさなければならない。この「仕事」を十分に成し遂げておかなければ、心身に病を引き起こすことがある。例えばイギリスの報告だが、54歳以上で妻を亡くした男性の、その後1年間の死亡率は、同年代で夫婦で暮らしている場合よりも、40%も高く、その死亡原因は心臓病、とくに心筋梗塞が多いと言う。悲しみ、寂しさをまぎらすため、酒や煙草の量が増えたり、多食に陥りがちだからである。しかし、この悲しみを乗り越えた暁には、人間的な一層の成熟がもたらされるとも言う。「喪の仕事」がそうであるように、死別の悲しみを乗り越えるためには、誰でもいくつかのプロセスを経なければならない。それらの諸段階を検討することにより、「悲しみを乗り越える」とはどういうことなのか。果たして、人間はどんな悲しみをも乗り越えることができるのか。そういった「悲しみ」の持つ意味について考えてみたい。この度の「阪神大震災」の夥しい数の死者を思う時、この問題はまことに切実かつ重大である。

### 都祁村生涯学習シリーズ

## 奈良大学教養講座

『生活文化を考える』—ゆとりと豊かさを求めて—

5月28日

## よき人との出会い

市川 良哉

人生にはいろいろな出会いがあります。それで結ばれたり離れたり、笑ったり悲しんだりさまざまなドラマがあります。そうした出会いを親鸞（1173-1262）と道元（1200-1253）という二人のすぐれた宗教思想家に見ていった。

親鸞が若き日に法然上人と邂逅し、道元が入宋して如浄禅師と相見して、出会いを契機にして、開かれた二人の新しい心の世界には、明らかに大きな転換が起こっていて、それが極めて独自ですぐれた生き方として生涯を貫くことになりました。

善知識 (kalyana-mitra) という言葉がありますが、サンスクリット語のカルヤーナは形容詞で美しい、善い、中性名詞で善、徳の意、ミトラは友人の意です。文字通り、“よき人”です。二人はそのよき人との出会いとその教えを終生、忘れることはありませんでした。それはどのような出会いであり教えであり、生き方であったのかをたどります。そして、それが今日にもつ意味を考えた。

## 7月16日 名句にふれ、俳句の歴史をたどる

永井 一彰

俳句と言えば芭蕉、芭蕉とくれば「古池の蛙」「わび・さび」というしんきくさいイメージが一般に出来上がっているようです。しかし、現代俳句のルーツである近世の俳諧は、もともと対話による機知をもてあそぶ明るく楽しい文芸でした。今回の講座では、俳諧の歴史をたどりながら、芭蕉・蕪村・一茶ら代表的俳人の句を取りあげ、その対話性・機知性について考えてみた。

## 8月27日 死生観を考える

市川 良哉

死はいつの時代においても、人びとの大きな課題でありました。そうであるならば、現代の問題としても、死生観の問題は我々の大きな関心を引きつけるところがあります。

そのことを考えるに際して、日本人の心の歴史をざっとたどります。死にかかわって、地獄や浄土の世界が問われました。わが国において最初に、地獄がどのような世界であり、浄土がどのような国土であるのかを本格的に問題にしたのは源信(942-1017)の『往生要集』です。源信の死の捉え方は、さかのぼって『古事記』神話に出てくる「黄泉の国」という死の国に比較すると、よほど違っているといわなければなりません。そうしたことをたどり問題がどこにあるかを考えた。

人は死を考えると、人間を超えたもの・生死を貫通するものによらない限り、死の問題は解決しません。生死を貫通するものとしての浄土がもつ意味を、親鸞の思想などを通して考えた。

10月8日

## 「都祁」の歴史を掘る

水野正好

大和の国原は、政治の中心地、その故もあって都がしばしばおかれた。崇神天皇の磯城瑞籬宮、天武天皇の藤原京、聖武天皇の平城京……。そこには如何に華々しい文化が根つき、いかに陰湿な策謀が働いたことか。こうした歴代天皇の都が次々と営まれた大和国原の遙か東、背後ともいうべき地——「都祁の地」はどのようにその時代、時代の人々から見られてきたのであろうか。

平城京の東をかざる山々、春日や三笠の山々の東の彼方——都祁の地は独特の世界をかもしだしていたと私は考えている。一つの顔は彼岸の地。平城京生者の都ならば都祁は死者の郷といった相貌である。弘仁天皇・太朝臣安萬侶墓などは南面する谷の奥部に骨壺を納め、左右の丘で風をさえぎる静寂な環境、「陽」の環境を守ろうとする気持ちを伝える奈良朝貴紳の墓であり、この地はそうした墓原となっているのである。〔こもりく隠国のはせ長谷〕と相通ずる世界がよみとられるのである。

平城京の宮殿や寺々に葺かれる瓦は余りにも多い。この瓦を焼く窯は遠隔の地では運搬に不便、従って平城山の背後、北側に設けられる。窯焼の材木や窯煙、出火といった点で都祁は選ばれないのであろう。しかし、その寒冷の地といった条件を利した氷室がこの地を卓越させ、有名にするのである。都祁と大和の都は表裏をなしており、その歴史は我々に実に楽しい想いにひたらせてくれるのである。

12月10日

## 言葉の戦後五十年

木村紀子

昔、かまどで炊飯していた時代、火は、まず「おこし」、「たきつけ」、薪などで「つぎ」、すめば「けす」といった過程と、それぞれの言葉をもつものでした。今、火の扱いは、ガスや電気のスイッチで「つける」か「けす」かの二つの言葉で用が足りてしまいます。

また、「水に流す」という表現は、清流に恵まれた日本の自然と、その中で生まれた人々の生活と心情に根ざす絶妙の比喩でしたが、近代の工業化社会には通用しない、公害発生の元凶のような感覚のものになってしまいました。生活の中の言葉は、日常の人と人との意思の通じ合いのためのものですから、社会や生活の変化に伴い、変わりゆく部分も多いものです。

敗戦後間もなく、日本の再生をかけて様々な制度が新たに定められた時期、当面使用する漢字はこの範囲でという「当用漢字」というものが定められ、後に若干補充され「常用漢字」と名称を変えた漢字使用の「目安」の表が公布されています。しかし、戦後50年を経た今、そこにはほとんど「常用」などされない字が少なからず含まれ、「常用」のものが入っていないという妙なものになりつつあります。50年間の社会の変貌の激しさを証明するものなのかもしれません。

2月25日

## 日本経済の現状と将来

稲 別 正 晴

戦後半世紀、日本経済は復興期の混乱、二度の石油ショック、円高ショック、さらにバブルの発生と崩壊などさまざまな危機を経験しながら発展し、世界経済活動の15%を占める経済大国となり、米、欧とともに世界経済の三局の一つを形成してきました。

しかし、いまや世界経済ではアジア諸国・地域、旧東欧社会主義諸国、さらに中南米諸国も加わり、「大競争」の時代が始まっています。これらの国々は安い賃金と相当の生産能力・技術を持ち、急速に成長を遂げ、大きな力を付けてきています。

このような状況の中で、日本経済は大きな変化を迫られつつあります。この変化を表すのが「規制緩和」、「価格破壊」、「円高」、「海外生産」、「産業の空洞化」などのキー・ワードです。

この講座では、今後の私達の生活水準はどうなるのか、雇用は大丈夫か、成長率はどうなるのか、日本の企業は外国企業と競争できるのか、……などの問題を念頭において、日本経済の現状と将来について考えた。

## 文 化 講 座

—大和の歴史と風土—

9月16日

## 春日大社と式年造替

岡 田 英 男

春日大社は奈良時代にすでに現在地に鎮座していた。現状は本殿が中門御廊の後に4棟が東西に並び、本殿の形式は春日造の最も純粋な形式を伝えている。社殿の旧状は古い春日宮曼荼羅図や『貞観儀式』の春日祭の記録によって推察される。

社殿はしばしば造替されているが、古くは伊勢神宮のような式年造替の制はなく、初期は神社自ら行い、やがて造国を定めて藤原氏の国司が行ってきたが、室町時代になると応永34年以降、21年の式年造替制をとり、桃山時代以後は徳川幕府が2万石を支出し、20年目ごとに式年造替が行われた。最後の造替は文久3年（1863）で、それ以後は屋根葺替、塗装等を行って造替とし、今日に至っている。

造替の際は本社本殿、摂社若宮神社本殿をはじめ各摂末社本殿も造替され、その古社殿は各地に広く分与され、現存するものが少なくない。

平安時代には廻廊内に神宮寺の社殿が建てられ、東西御塔（奈良国立博物館構内に遺跡が残る）も興福寺五重塔と高さを競い、平安時代に中門・御廊、南門・廻廊（東北部は築垣）が建てられた。社殿周囲には道場・台所・中門等からなる多数の興福寺の供僧舎が建てられていたが、維新の際にはほとんど撤去され、一部の門と奈良公園内に移された板倉（重要文化財）が残るのみである。

春日造の社殿は奈良県下を中心に広く分布するが、古社殿以外は春日大社本殿の形式とは庇の取付き手法が異なる。春日大社は全体の構成をよく残し、仏教関係の建物はほとんど失われたが、広く県民の信仰を集め、奈良を代表する重要な文化遺産である。

9月23日

## 行基と東大寺

水野柳太郎

東大寺創建に関与したとされる四聖の一人に、「勸進行基」がある。行基の勸進は、『続日本紀』巻15の天平15年（743）10月乙丑（19日）条に、

乙丑。皇帝紫香楽宮に御し、盧舎那仏像を造り奉らんが為に、始めて寺地を開く。是に於いて、行基法師弟子等を率いて、衆諸を勸進す。

とあるのが最古の史料であるが孤立していて、鎌倉時代の初の東大寺再建に際して、俊乗坊重源が全国に勸進する先蹤として行基の活動を取上げるまでは、触れられたことがなかった。この記事をもとにして、この50年の間に、行基の布教する対象は民衆であったが、ここに至って権力者側に協力をはじめ、最後には大僧正になるなど、極端には民衆を裏切ったとする見解さえ現れた。しかし、その根拠となるこの記事の検討は充分とはいえなかった。

この記事には、用字の上で問題がある。「御する」というのは、『続日本紀』の用例を検討すると、天皇が移動して、移動先で行事を行う場合に使用されている。この場合、聖武天皇は七月以来紫香楽宮に滞在していたので、紫香楽宮から紫香楽宮に移動して寺地を開いたという意味をなさない文章になる。これは、この記事が『続日本紀』の原稿がある程度できた後に、何らかの材料によって記載したための誤用である。もとの材料の中で、天皇が恭仁宮から紫香楽宮に移動してそこでの意味で、「御」が使われていたならば不自然な用法ではない。この記事で天皇を「皇帝」と記すのもやや異例で、後から手が加えられたことを示すようである。

この記事の材料になったのは、『続日本紀』の宝亀4年（773）11月辛卯（20日）条に、行基が建立した四十九院のうち、土地を持たない6院に水田を施入したとあるが、その措置を請願した文書であると推定できる。天平勝宝元年（749）2月丁酉（2日）条の行基死亡記事に記された伝記も、同じ文書から採録されている。その文書では、請願の効果をあげるために建立者行基の功績を述べ聖武天皇の帰依をうける機縁となったのが大仏勸進であったとした。この場合、国家的な災厄排除や天皇の病氣平癒の祈禱などが適当であるが、行基には適当な事実がなかったらしい。このような利権獲得を目的とした文書には、史実の歪曲や誇張があるから、

記載の信憑性は慎重に判断する必要がある。

行基は、養老4年(717)にその民間布教の方式が『僧尼令』に違反し脅迫的であると指弾された。従来はこの後も行基はその態度を変えていないとされていた。しかし、天平3年(731)には、行基に従う老年の修行者の出家得度が認められ、天平10年(738)頃には、政府関係の法律家から「行基大徳」と呼ばれ、同じころ最高の僧位「師位」を持ち薬師寺に在籍していたとする史料がある。これは、行基が布教の方式を変えて政府との摩擦を避け、政府から高僧としての資質が認められていたことを示している。このような行基が、聖武天皇が発願した大仏造営に賛成し、勸進行為を行ったとしても不思議ではない。民衆を裏切ったとするような見解は、行基を日本の宗教改革や革命のせんくしゃとしたいという願望が先行しているようである。

天平15年(743)の大仏造営発願詔には、微少な品物でも寄進を奨励する文言があり、財物寄進によって叙位された例がある。これらには、国家組織を通じて周知されたものが多いのであろうが、大仏造営を善根と認めた僧侶の勸進によるものもあったかと思われる。東大寺境内には、行基が和銅元年(708)に建立した天地院があった。それが東大寺のなかに包摂されているから、かれが大仏と無縁であったのでもない。行基も、大仏造営に協力して勸進した僧侶の一人であっても不思議ではない。しかし、行基一人が大きく取りあげられているのは、水田施入を請願した文書の誇張と、それを採録した『続日本紀』の記事を俊乗坊重源が広く宣伝したことによるのである。

○付記 詳細については、「続日本紀研究」300号(1996.3.20)所載の拙稿「行基の大仏勸進記事をめぐって」を参照されたい。

## 9月30日 正倉院宝物 一香印坐について一

光 森 正 士

香印坐は奈良時代の香具。仏前にて用いられたもので、正しくは「香印坐花」と称した。正倉院南倉には甲号と乙号との二基があり、両者はほぼ同大・同意匠である。それは岩座の上に蓮華が大きく花開いた形に造られており、八方四段、都合三十二枚の蓮弁が金色と極彩色につつまれ、まさに豪華絢爛たる装いを示し、数多い正倉院宝物の中にあっても一際光彩を放つ傑出した存在である。

しかし、いま見る香印坐の姿はかならずしも当初のままではないと考えられ、そのもとの姿かたちを考えてみたい。花芯にあたる蓮肉部には鍛造による銅盤が付属し、その上には蓋形の火屋があったろう。また岩座の下にも褥しよくや案あん・几きなどが用意されたであろう。これらの推測を可能ならしめる資料として中国の敦煌莫高窟にみられる壁画があり、また火屋の作例としては韓国扶余博物館にあり、唐代の金銅の作品がわが国個人蔵品にも認める。

現存する二基の香印坐は一对として用いられたものではなく、一基ずつ仏前に供され、一基

は代替用として用意されたと考えられる。

文献によると、東大寺阿弥陀院には香印坐が二基あったと記されており、いまに遺るこの正倉院南倉の香印坐二基がそれに相当する可能性は充分にある。いずれにしても香印坐二基はまさしく天平の精華といえる作品であり、すこぶる貴重な宝物である。

10月21日

## 奈良のまちづくり

實 清 隆

この講義では、如何にすれば、奈良の歴史を生かした、住みよい町づくりができるかを考えた。奈良には三つの顔がある。一つは、平城京、東大寺に代表される「古代」の顔、二つは、奈良町の「中世」の顔、三つは、大阪・京都のベッドタウン、関西学術研究都市としての「現代」の顔がある。

まちづくりのポイントは当該地域の個性を生かしつつ、アメニティ豊かな街を作る事である。この個性とは、ひっきょう、「歴史」である。だからこの三つの顔がどれだけうまく表現出来るかが大切である。

奈良市は歴史を誇る国際観光都市を昌っているものの、まだまだ課題は山積みしている。例えば、①宿泊施設の不足、グルメのアップール性不足、夜が早くショー的センスが無いなど、「街」としての魅力が不足し、観光客数が減少してきている。②大量の車の流入により、排気ガス等により、文化財の金属腐食、飛火野の樹木の立枯れがみられる。③奈良町の歴史的町並みの破壊や消滅が進行している。④道路の段差があったり、リフト付きバスが無いなど、高齢者・障害者への配慮が不足している。⑤秋篠川や佐保川が市民の「憩いの自然」として生かされていない。⑥市民が生き生きするようなイベントがない。⑦震災に対する備えが不安である。など課題が多い。

演者は、これまでの、欧米の留学や調査・研究で得た都市計画、街づくりのノウハウを踏まえ、こういった課題を解決すると共に、魅力のある奈良のまちづくりを論じた。

10月28日

## 万葉集と藤原京 —創都1300年にちなんで—

上 野 誠

『万葉集』の世界は広く、そして深い。

万葉の都といわれている藤原京。その藤原京をめぐる万葉歌を読み解きながら、藤原京の時代とそこに生きた万葉びとの〈うた〉表現を本講座では考えてみた。そも、なぜ藤原京を万葉の都と規定することができるのだろうか。もちろん、持統天皇や柿本人麻呂は藤原京の主人で

あり住人の一人であったことは、間違いないのだが……。理由は、たんにそれだけではない。実は、『万葉集』二十巻の核となる巻一と巻二は、柿本人麻呂の作品を中心に編纂されていると言っても過言ではなく、その編纂はどうか藤原京の時代にスタートしているのである。つまり、『万葉集』という歌集の始発も藤原京にあると見てよいのである。江戸期の代表的注釈書の一つである賀茂真淵『万葉考』は、『万葉集』巻一の「藤原御井歌」（五二）の表現を手掛かりに、藤原宮は大和三山の真ん中であると推定している。『万葉集』の藤原宮関係歌や大和三山関係歌を取り上げながら、『万葉集』にとっての藤原宮・藤原京と、その時代について受講の皆さんと考えた講座であった。

## 社会学部公開講座

### I. 公開講座の概要

#### 1. テーマ

高齢者のパワーを生かす社会を目指して

— 国・自治体、企業、個人それぞれの課題 —

#### 2. 講師およびテーマ

三谷直紀 神戸大学経済学部助教授

「高齢化社会における雇用問題と高齢者活用の条件」

泉 輝孝 奈良大学社会学部教授

「生涯現役に備えるミドルからのキャリア開発」

日比野勸 ビジネスライブの会会長

「生涯現役の生活設計とそれを支える社会システムの構築」

桂良太郎 奈良大学社会学部助教授

「高齢者自身による誰もが暮らしやすいまちづくりについての提案」

進行 荒川茂則 奈良大学社会学部助手

#### 3. 日時

平成 7 年 10 月 28 日 午後 1 時半～ 4 時 40 分

#### 4. 会場

奈良マーチャントシードセンター

## 5. 来聴者

一般 55人、 学生 22人

## II. 実施結果の概要

### 1. 準備

平成7年度社会学部公開講座については、桂、荒川、泉の3名が担当した。今年度のテーマは、社会学部学会および総合研究所運営委員会の議を経て「高齢者のパワーを生かす社会を目指して」とし、シンポジウム形式で実施することが決定された。講師は、部外から日比野勸、三谷直紀両氏を招き、部内から桂、泉の2名が参加し、進行役を荒川が担当した。

会場の設営、来聴者の受付等については桂ゼミの学生が総出であたることとした。

PRのためポスターおよびチラシを作成し、桂を中心に県庁、市役所、労働基準局、高齢者団体、婦人団体など関係機関を精力的に回り、PRに努めた。また、講師の日比野氏を通して同氏が主催するビジネスライブの会奈良支部会員に参加を呼びかけるよう依頼した。

### 2. 実施状況

当初心配された部外参加者は55名に上り、シンポジウムは大いに盛り上がった。

最初に、4人の講師がそれぞれ20分間のプレゼンテーションを行い、ついで各講師からもっとも強調すべき政策課題とそのための対策について意見を求め、そのあとフロアからの参加により質疑応答、討議を行った。

フロアからは積極的な発言が多く、なかでもビジネスライブの会奈良支部からの参加者（大企業OB）の発言が討議を盛り上げるのに大いに寄与した。

高齢化社会を迎えて、老人大学ではない中高年者対象の職業能力開発システム整備に大学の参加が必要ではないかという思いを強くした。

#### （各講師の強調点）

三谷： 高齢者の雇用機会を増やしていくこと。そのため企業のこれまでの人事管理方針の大幅な転換、とくに時短が必要。

泉： 大企業といえども終身雇用が保証されない時代を迎えて、自分を自分で守るため、社会的に通用する能力開発に努力すること、そのためには自分の仕事を面白く工夫、仕事に関連した自己啓発の努力とそれを支援する体制整備が必要。

日比野： プロダクティブ・エイジングの社会をみんなでつくること。そのために受け身の生涯教育（老人大学）に公的資金を注ぎ込むのではなく、多様な就業機会をつくりだすためのシステム整備に重点的資源投入が必要。

桂： 高齢者の多様な能力を生かすまちづくりが重要課題。そのために、仕事人間からの離脱、家庭やまちの機能の回復をはかること。

(フロアーからの主な質問)

- 中高年者の雇用促進の決め手は何か。
- 中小企業の生き残り与时短は両立しないのではないか。
- 欧米の中高年者の能力開発の現状。
- 加齢による能力の変化をどうみるか。
- 国際化時代にトランスフェラブル・スキルを生かした雇用機会の拡大。
- ビジネスライプの会組織化の成功要因。
- 高齢化対策を知事選の争点にするような取り組みができないか。

(文責・泉)